

リルケとカフカ（Ⅱ）

序説—リルケとカフカは出会ったか？（中篇）

河 中 正 彦

第Ⅰ章 リルケとカフカは出会ったか？（承前）

〔Ⅰ-4〕 リルケの足どり

すでに前号の結尾で総括的に予告したように、私たちの問いは今、カフカがミュンヘンの画廊ゴルツで自作「流刑地にて」を公開朗読した頃（1916年11月10日）、リルケは一体なにをしていたのか、という問題にむかわねばならない。

リルケとミュンヘンの関係は、決して等閑にできない大きな問題を孕んでいるのだが、彼とプラハ・ロシア・スペイン・エジプト・スイス等との関係のように、まだ主題化されていない。リルケのミュンヘン在住期は大約二つの時期に分けることができよう。

第一期は、彼が故郷の町プラハを去って、はじめて自立した生活の場としてミュンヘンを選び、やがてルー・ザロメの後を追ってベルリンに移り住むまでの約一年間（1896年9月末～97年10月初旬）である。

第二期は、本拠地パリからドイツへ旅行中、ライプツィヒのキッペンベルクの所で第一次世界大戦の勃発にあい、フランスに帰れなくなって、そのままミュンヘンに居つくようになってから、スイスに移住するまでの約五年間（1914年7月下旬～19年6月中旬）である。私たちにとって問題となるのは、従ってこの第二のミュンヘン在住期である。

Die Entstehung dieser Abhandlung verdanke ich der Alexander-von-Humboldt-Stiftung, die mir den Studienaufenthalt von 1. Mai 1984 bis 31. Dezember 1985 ermöglichte.

第一期のミュンヘンは、リルケがプラハからの脱出を、「私の若い力の最初の成果」¹⁾と自讃したように、彼の生涯でも最も希望に充ちた輝かしい時期をなしている。ミュンヘンでリルケが何より望んでいたのは、プラハには到底不可能と思われた、「様々な精神運動とのつながり」²⁾を獲得することであった。

しかしなぜそれがほかならぬミュンヘンであって、ウィーンでもベルリンでもブレスラウでもなかったのかという謎は残る。リルケがウィーンへ行くことはまじなかつた。なぜなら1873年のウィーンの株式市場の大暴落以来³⁾、文化の中心はウィーンからベルリンへ移っていたし、それよりも重要なことだが、軍陸幼年学校以来反カトリックの立場をとったリルケが⁴⁾、フス運動を鎮圧しボヘミアにカトリックを支配者の意志として押しつけたハプスブルク家のお膝元に行くはずがなかつた。ウィーンは、ユダヤ人でありながらカトリックに改宗したフランツ・ヴェルフェルなら住みやすかつたかもしれないが、リルケにとっては住みにくかつたはずである。

ではベルリンは？ベルリンはウィーンより文化的には旺盛な生命力をもっていたかもしれないが、リルケはドイツ人とその精神に対して烈しい嫌悪を抱いていたし、その最も否定的な面をプロシヤに見ていたので、そう好んで行く都市でもなかつたであろう。「ドイツ人に関していえば、私ほど彼らの本質に疎遠な人間もいないのです。もし私がだれか一人の人間を殺すことができるなら、私の最初の犠牲者はヴィルヘルム二世という犯罪者でしょう。」⁵⁾30年間プロシヤ王として君臨（1888-1918）したヴィルヘルム二世をまず殺したいというリルケの言葉から、彼の反プロシヤの態度は容易に察しがつく筈である。リルケはさらに別の文章で、分岐点に位置していた19世紀初葉のプロシヤからは、現にあるのとは全く別のものが生まれる可能性もあつたのに、「我々と同時代のプロシヤの顎骨の残忍さ」⁶⁾に比べれば当時のプロシヤは何という違いだつたらうと述べている。カトリシズムのウィーンやプロシヤのベルリンに比べれば、バイエルンの首都ミュンヘンには当時ゲオルゲのサークルや、トーマス・マンなど多くの詩人が居たので、精神運動の渦中に飛び込む場所として好ましかつたに違いない。まさに希望どおり、彼はミュンヘンで詩人のヴィルヘルム・フォン・ショルツやヤーコプ・ヴァッサーマンと出会うが、この経緯は、「エーヴァルト・トラギー」⁷⁾の第二部に詳しく描かれている。特にヴァッサーマンとの出会いは重要で、彼はリルケにヤコブセンとツルゲーネフの作品を読むようにすすめて、ルー・ザロメを紹介した。ヤコブセンはリルケに最も深い影響を与えた作家であり⁸⁾、ルー・ザロメは彼に最も深い影響を与えた人間であることを考えれば、リルケにとってミュンヘ

ンにかけた希望は充分に酬られたといえる。

それにひきかえ、第二のミュンヘン時代はリルケの生涯で最も暗澹たる時期であった。最初のミュンヘンは彼が自ら選んで赴いた町であったが、次のミュンヘンは仕方なく強いられてしぶしぶ住んだ町であった。

リルケは1914年7月19日、ほんの「二ヶ月の予定で」⁹⁾自分の全財産をパリに残したままドイツに旅立った。この旅行の目的はルー・ザロメとインゼル書店のキッペンベルクに会うのが主要なものであった。7月19日から23日にかけて、ゲッティンゲンでルーに会い、その足でライプツィヒのインゼル書店に赴いて、「フライブルク大学に通わせてもらう」¹⁰⁾ことが取りきめられた。しかしこの計画は大战のため実現されなかったようである。25日には詩人ヴェルフェルに会い、29日にはクルト・ヴォルフに会って、8月1日にルーに会うためにミュンヘンに行った。しかし彼女はまさにその日にゲッティンゲンに帰っていて会えなかった。リルケはミュンヘンに留った。第二次ミュンヘン時代の始まりである。

第一次大戦はリルケにとって様々な意味で傷手であった。第一にパリに残していた全財産は没収され競売に付され、第二に仕事場としてのパリを奪われ、第三に彼の世界観は攪乱され、修正を余儀なくされた。その上に兵役によって創作面で重大な支障を被った。

第一の物損についていえば、リルケは幼時から手元において愛惜していた「父のダグレオタイプの写真や古いキリスト像」¹¹⁾、数百冊の本、手紙類、草稿類、家具などであった。手沢の愛読書を失い、ロダン、ヴェルハーレン、エレオノラ・ドゥーゼなどの愛着の深い手紙¹²⁾、書きかけで途絶した草稿を失った。これらの喪失が詩人にとってどんなむごいものであったかは想像に余りある。それはまるで歯を一挙に全部抜かれるようなものであったろう。たとえリルケがかねがね「無所有」を標榜していた詩人であったにせよ¹³⁾、である。

第二に彼は最良の仕事場としてのパリを喪った。彼が旅行した国や町で最も大きな影響を与えたのは、ロシアとパリである。「私は、今までに私のできた最良のものをこの町に負っています。」¹⁴⁾「私は何と多くをパリに負っていることでしょう。それをパリに感謝することを私は決してやめません。」¹⁵⁾リルケにとってパリに帰れないことは、最良の仕事を可能にしてくれる場所を失うことであった。

第三に彼は創作を個の背後から支える世界像を失ってしまった。リルケはへ

レーネ・フォン・ノスティツに1915年7月に次のように述べている。

《今では書くことは、自分の能力を超えたことをすることです。というのも、人の触れるものすべてが識別のつかないものである所、どんな感情も希望もなにひとつとして誰のものともならない所、どこからもたらされたのか知りませんが苦悩・絶望・犠牲・苦難の莫大なストックが大量に使い果される所、それもまるでどこかにすべてが一緒くたになっていて、どこにもそれらのひとつひとつがないようにみえる、そんな所で一体何を書けというのです。かつては天や地やすべての広がりや深淵を測る単位となっていた各人の心という尺度など何処にもないのです。》

第一次大戦がリルケにとって、他の詩人にも類例のないほど深い衝撃、否ほとんど精神的瓦解をさえもたらしたかを、ここから明らかに読みとることができる。「すべての眼にみえるものが、今や再び煮えたぎる深淵に投げこまれ、溶けてしまいました。過去は蘇らず、未来は歩みをためらい、現在は底なしです。」¹⁷⁾このような状況のなかで、なにかを書く試みが実を結ぶはずがなかった。二千を超えるリルケの詩作のうち、このミュンヘンでの5年間に成立したのは百に満たないばかりでなく、質的にも「ヘルダーリンに寄す」「心の山々にさらされて」「クリスマス前に」「死」などと、第四の悲歌を除けば秀作は少ない。リルケはこの時、まさに壮年期、三十九才から四十四才であったことを考え併わせれば、大戦が彼に与えた震撼の深さがうかがえよう。

このような物的心的な状態のうえに、さらに召集の追いうちがかかってきた。リルケは兵役を免れようと様々に工作したが、結果は入営地をトゥルナウからウィーンに変更できただけであった。1916年1月4日に入営した40才の初年兵は、「何度も戦場に行ったかもしれない穴だらけの古い軍服」¹⁸⁾をきせられて、銃と背のうをかついで三週間「調教」¹⁹⁾された。彼は教練の際気絶さえした²⁰⁾。またリルケが貴族や高官を使って様々な工作をしたことが知れていたので、中隊や大隊の不興を買い、大目にみて寛大に扱われることも叶わなかったのである²¹⁾。初年兵いじめはどこでも同じで、上官にリルケが名乗ると、男がマリアという名をつけているのはケシカランと難くせをつけられ、ミッツイーと呼んでからかわれた。リルケが「魔弾の射手」の作曲者もカール・マリア・ヴェーバーという名だと答えると、ここでは勝手に射つ (Freischütz) のじゃなく、号令されたときだけ射つんだ、とどなられ、そのマリアは背のうにでも入れておけ、と言われた。その翌日リルケが教練でしごかれていた正にその時、救いの手がさしのべられた。トゥルン・ウント・タクシス侯爵夫人を伴ったフォン・ヘーン大将が現われ、リ

ルケは直ちに軍事文書課に配置がえとなった²²⁾。この措置がなければ、教録は三週間で済まなかったであろう。

文書課での仕事は「英雄をデッチあげる」²³⁾ことであり、肉体をいじめなくても済んだかわりに、今度は精神をさいなまねばならなかった。シュテファン・ツヴァイクやアルフレート・ポルガーなどの著名な作家たちも働いていたこの文書課から、ルケが解放されたのは1916年6月27日のことであった²⁴⁾。ウィーンにさらに三週間滞在したのち、7月18日にルケはミュンヘンに帰ってきた²⁵⁾。

ルケは明らかに疲労困憊していた。その疲労は単に肉体のそればかりでなく、また精神の疲れでもあった。「私は愚鈍になり、頭のこんぐらがった状態で、しかるべき踏切り台もなしにここに到着したので」²⁶⁾回復が思わしくない、と妻クララへの手紙で述べている。また軍役に服していた間、借家を確保してくれていたシドニー・ナドヘルニーへのお礼の手紙では、「内部ではすべてが生き埋めに遭ったように思われますが、外部から少しずつ、単なる行為が内的な感情へと(私はこの内的な感情に対するいわく言いがたい欲求を感じているのですが) 変転する場所へと行くでしょう。」²⁷⁾と示している。

この「生き埋め」(Verschüttung)という言葉こそ、ルケの軍務体験をよく象徴する言葉であって、ルケは何度も愛用しているばかりでなく、後に触れるように文芸批評の用語としても用いている²⁸⁾。

大約このような生活史の文脈のなかでルケがカフカと会ったかもしれない1916年11月の状況をさらに詳しく追跡してみよう。

ルケがミュンヘンの画廊ゴルトツで催された朗読会のシリーズ《新しい文学の夕べ》に初めて参加したのは、第三の夕べでアルフレート・ヴォルフエンシュタインの朗読した10月10日のことである。この日ルケは、グレーテ・リヒテンシュタイン夫人の「お茶の時間」(というから3時頃であろう)にまねかれた後、この朗読会を聞きに行った²⁹⁾。ルケはどうやら第一回のザローモ・フリートレンダー(9月8日)と第二回のエルゼ・ラスカー＝シューラー(9月26日)は聞き逃したようである。

ルケは次の第四回(1916年10月27日)、テオドーア・ドイブラーの朗読も聞いている。カタリーナ・キッペンベルクはルケに、10月25日の短い葉書でドイブラーの朗読を逃さぬように頼んだが³⁰⁾、ルケはそれを受信したときにはもう、

切符を入手していた³¹⁾。それ所か、リルケはドイプラーの本を数冊読み、なま身の詩人が彼の作品の凄じいばかりのうず高い集積を、秩序だった響きによってどのように形象にまで高めるか、声と姿が詩作品の不透明な塊に一条の光を与え、統一された像が浮びあがるかを、救いのように待ちかまえていたのである。しかしリルケは裏切られた。

《彼の詩を読めば読むほど私をうろたえさせ、その下で私がるで岩屑の下になったように消えてしまうあの例の衝撃的な生き埋めを、もう一度、今度は生身の人間から味わうということ以外、何ひとつ彼は私に与えてくれませんでした。絶え間なく降りかかってくる朗読は、全く同じ苦痛を私に与えました。最初は灰の雨、それから屑、ついには、鉦滓のような言葉の怪物の、際限のない重圧に沈没していくことになるのです。私は、エルゼ・ラスカー＝シューラーがもの静かにそうしたようには、とてもものにその後で彼に握手することができませんでした。》³²⁾

このカタリーナ・キッペンベルク宛（11月2日）の手紙の印象は、もう一度タンクマール・ミュンヒハウゼン男爵宛の手紙（11月13日）で確認されている。

《ドイプラーときたら、やれやれ。彼の夕べは一週間ずらされましたが、私の記憶に残る最も濃密な出来ごとのひとつでした。彼の詩の印象はもう一度（注——本で読んだ時と）同じ生き埋めでした。まるで本を整理しているときに、一番上に置いた数列が頭や肩に落ちてきて、その中には大部の本や百科辞典があり、そしておまけにもう一冊といった具合なのです。この場合この災いは、明らかに人のいい堂々たる性質から生じています。ひとは、こうでしかありやうのないこの山の神（鉦山の神）に好意を持ちます——ただ彼になんと言ったものか解りませんので、それからは彼と知りあいになるのを避けていました。彼が事物の上に光を投げかけることも全くせず、事物を透き通るようにもしないで、もう一度自分一人のものに、重くしてしまうだけなのは、奇妙です。

今日ゴルツの所で、ベルリンの“新人”のオールスター、彼ドイプラー、ラスカー＝シューラー、ベッヒャー、ゲオルク・グロース、ヘルツフェルデたちが、そろって17日に夕べを催すという広告がかかっていました。私はとてもものに持たないのでは、と恐れています》³³⁾

5日後の18日の手紙（カタリーナ・キッペンベルク宛）で、リルケは前の晩の

朗読会のことに触れ、「最近の重苦しい印象のあとでは、どうしても再び行く気にはなれませんでした。」³⁴⁾と述べているから、第6回の朗読会には行かなかったことが解る。

従ってリルケが、ゴルツの連続朗読会のうち第3回と第4回に出席したのは確認されているし、6回目以降は出席していないことが確認されているのだが、我々にとって不運なことに、まさにここで問題となっている第5回のカフカの夕べについては、どんな言及も見当らないのである。リルケが何らかの仕方（原稿で読んだのであれ、会場で聞いたのであれ）でカフカの「流刑地にて」を知っていたのは確かなのだし、またなんらかの仕方（直接自分で伝えたのであれ、人づてであれ）自分の感想をカフカに伝えたことだけは確かであるのに、リルケはそれについては何も触れてはいない。リルケは第4回のドイプラーの朗読会で失望し、そのままこのシリーズに見切りをつけたのか、それともカフカの朗読会までは出席して、再びドイプラーが登場するに及んで行くのをやめたのかはリルケの側の証言からは明らかでない。リルケのこの時期の手紙は極めて少なく、11月中の書簡をすべて挙げてみてもわずか8通にすぎない。その理由は、11月7日付のシドニー・ナドヘルニー宛の手紙が最も適切な示唆を与えている。ひとつは内面的な不毛と枯渇であり、もうひとつは、他人との交渉が余りにも多すぎることにあった。ひとつは自分との関係がうまくいかない時には、他人の中に逃げ込むものである。

《今の所私は活発旺盛に手紙をかいてはいませんし、書くことがないも同然なのです。これは、愛するシディー、あなたも御存知のように、あなたへの関心が薄くなったのではなく、大戦前からしばしばあった枯渇、涯しなく続く大戦の年月の憂慮のために増々悪化してしまった枯渇が私の本性に巣喰っているからなのです。……

他方では、私がふだんよりさらに一層人間に対する欲求に屈し、他人が殺到してくるのを嘆いている間にさえ、さらに新しい他人を呼びよせ、彼らに身をまかせているのですが、これも偶然ではないのでしょうか。私が（ミュンヘンに）還ってから、ここでもまた一人であることが余りにも少なすぎると告白せざるをえないのです。》³⁵⁾

リルケはこの頃、ジビル・ファーネ (Sybill Vane) という女性とつきあっていた。この女性のことは不明な所が多く、最近の詳細な伝記も少しも彼女に言及していない。シュナックだけが1916年12月4日の項に、「リルケは41才の誕生日に、

ゴットフリート・ケルヴェルの朗読会を訪れる。ジビル・ファーネが朗読³⁶⁾と簡潔に触れている。またシュナックの人名索引には、この女性は自由に客演して廻る女流芸術家で、1916年はフランクフルトに、18年から19年にかけてはベルリンのキャバレー（寄席）「トリビューネ」に参与した³⁷⁾、というコメントがついているのみである。

しかしオイゲン・モントの回想には、彼女が女優であり、かつ朗読家であったこと、また彼女がケルヴェルの詩を朗読した場所は、奇しくもカフカがミュンヘンで朗読した際に泊ったのと同じホテル、バイエリッシャー・ホーフであった³⁸⁾、という記述がみられる。彼女はバイエルン南部の山岳地帯でそだち、躰のよい人に特徴的な率直さが際立っていた。ジビルとは、古代の巫女を意味するが、その名にふさわしく、彼女の話は生き生きとして、活気づける所があった。彼女はケルヴェルの詩をフランス語に翻訳していたという³⁸⁾。

ジビル・ファーネはリルケの伝記では彼の恋人として登録されていないが、この二人の関係は相当にねんごろであったのではないか、と思わせるふしがある³⁹⁾。というのも、オイゲン・モントがリルケと会った時には、いつも彼女が同席している。モントは彼女がとても美しかったと二度も強調している⁴⁰⁾。モントがリルケを訪れたとき、車で買ったわずかなバラを持って行った。そのとき丁度リルケとファーネはかかえ切れない程のバラを持って帰ってきた所で、モントは恥をかかねばならなかった。彼のバラは、「バラの海で消え失せた」のである⁴¹⁾。またファーネが親指の爪をけがして、爪切り鋏（Nagelschere）をリルケに借りようとしたら、リルケは間違えて釘抜き（Nagelfange）を渡した、という挿話も紹介されている⁴²⁾。

もしリルケがカフカの朗読会に行かなかったとしたら、多分この女性か、或いは次に現われたミア・マッタオホ（Mia Mattauch）との関係がからんでいたのではないか、と思われる。彼女の名がリルケの手紙に初めて浮んでくるのは、12月7日のことであり⁴³⁾、さらに翌年1月6日のルー宛の手紙にもこの女性のことが言及されている。「ウィーンでの割れ目（注——兵役のこと）以来、落ちつきと仕事がまだ私の内部に訪れて来ませんが、先月の落ちつきのなさはまるで不安な天使たちのそれのようなのです。とても美しい若い少女が私のそばに居てくれることから生じたものです。」⁴⁴⁾さらに翌17年1月24日の手紙には、「それ（ルーシィ・ゴルトシュミット＝ロートシルトの訪問）以外には、数ヶ月前から私はたった一人の人間、美しい若い娘さんにしか会ったことはありません。これは私には

救いです。青春は今まっさかりです。」⁴⁵⁾と記されている。

リルケの足どりが、カフカの朗読会の前後で特に不明な点が多いとすれば、それはリルケが「一人でいることが余りにも少なすぎた」せいだろう。ファーネとの関係が、どの程度のものであったかは明らかでないとしても、ミア・マツアオホとの関係は「情熱的」⁴⁶⁾なものであった。しかし彼女たちは、他の女性たちと違って回想や手紙の類を公開しなかったので、私たちがその内実を知ることには今の所できないのである。女性との関係を好んで他人に語りたがらぬ所に、リルケの足どりが明らかにならぬ理由があるように思われる。

〔I-5〕論争史の総括

リルケとカフカが会ったかどうかについて言及した文学史家たちの意見を総括するまえに、ひとつだけ事実関係で明らかにしておきたいことがある。

それはカフカの「流刑地にて」の原稿の検閲の問題である。すでに前篇で指摘したとうり、カフカの原稿は1916年10月30日（ボルンは誤って9月30日としている）にミュンヘンに着いていた。カフカは自分の原稿がミュンヘンで官憲の検閲に通るかどうか、大変心配している。10月27日にはフェリーツェに宛てて、朗読の唯一の障害は検閲だと述べ、29日にも、当局に認められなければ朗読を断らざるをえない、と告げている。11月3日は、さらに悲観的で、作品がいかに罪のないものでも、許可されるなんて想像がつかない、と書き送り、朗読会の5日まえの11月5日に、最終的には電報で行くか行かないか打ち合わせることを約している。もし検閲が行なわれて、ギリギリまで原稿が官憲の手にあったとしたら、リルケがカフカの作品を原稿の状態を読んで、オイゲン・モントに感想だけを伝えさせたのだ、というボルンの仮説はくずれることになる。なぜなら原稿がゴルトツのもとに着いたのが月曜日だったので、検閲を早急に通すためには、すぐにそれを官憲の手に渡す必要があっただろうから。

従って、カフカの原稿が検閲を受けたのか、受けたとすれば、いつ受理されていつ許可されたのかは、リルケとカフカの出会いを占う大きな争点となる。誰でもミュンヘンの軍事文書館で古文書をめくってみれば、と考えるであろう。前篇の執筆が終ってから、遅まきながら、私はミュンヘンの軍事文書館に手紙を書いた。

私は前篇を書いた時点で、検閲の存在自体を少しも疑っていなかった。カフカ

はフェリーツェ宛の手紙で四度も検閲に言及する程、そのことを気にかけていたからである。カフカの書簡からは残念ながら検閲の最終的な帰趨は解らない。

それ故ミュンヘンの軍事文書館からの返事は全く意外なものであった。「カフカの物語《流刑地にて》は一度も軍事検閲所に提出されたことはありません。ミュンヘンの州立文書館の同僚にも問い合わせても（そこにはミュンヘンの警察本部の文書が保管されているのですが）、当時純文学作品の警察による検閲は行なわれなかった、という返事でした。私の推測では、カフカは誤って、外国人である自分は手稿を検閲所に提示せねばならないと仮定したのであろう、と思います。」⁴⁷⁾という返事であった。

もし軍事文書館にも警察関係の文書にもなんらの手がかりが残されていないとすれば、もう手の打ちようはない。軍事文書館からの返信の文面からは、Kriegsarchiv (Bayerisches Hauptstaatsarchiv) と Staatsarchiv München との関係がよく解らないのだが、前者は軍部の文書を、後者は警察の文書を保管しているようである。軍部の検閲はあった。しかし警察の検閲はなかったということか？当時しかし検閲そのものがなかったということは考えられない。それには二つの根拠がある。

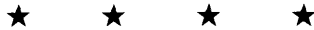
第一は、カフカは朗読会の10日程前にミュンヘンに草稿を送っている。当時の郵便事情は不安定で、カフカはフェリーツェやミレナに、来るはずの手紙が来ないことを何度も嘆いている程だから、一番安全なのは自分で草稿をミュンヘンに持参することだ。それをわざわざ10日も前にゴルツに送っているのは、検閲のためとしか考えられない。ゴルツの要請がなければ、当日持って行けばすむ原稿をわざわざ送るはずがない。しかもゴルツは朗読会の組織者としてはヴェテランであったから、検閲があったかどうかを知らない筈がない。検閲はあった、と考えなければ、カフカが10日も前に草稿を送ったことが謎として残ることになる。

第二にリルケも1915年7月19日のエルザ・ブルックマン宛の手紙で検閲のことに触れている。プラハにいたカフカが、バイエルンの検閲の事情について思い違いをすることは考えられても、当時ミュンヘンに二度目、しかも一年前から住んでいたリルケが検閲について知らぬ筈がない。

リルケはブルックマン宛の手紙で、無責任な早とちりで『時禱書』の朗読を了承したが、「それが検閲に抵触しない見込みはほとんどない」⁴⁸⁾として、朗読を断っている。

従って1915年と翌16年との間に状況の変化がない限り（第一次大戦はなお継続中だったから、それはまず考えられない）、カフカの草稿は検閲をくぐったと考えるのが順当である。

もし検閲がなかったとすれば原稿は9月30日から11月10日までゴルツの元にあったことになるが、検閲が行なわれたとすれば何日かはゴルツの元になかった訳で、リルケが草稿の状態でカフカの作品を読んだ可能性はそれだけ薄くなる。今の所は断定を控えることにして、今後の調査に待ちたい。



既に何度も触れたように、最初に問題を提起したのは、カフカの『フェリーツェへの手紙』の編者ユルゲン・ボルンであった。1967年に出版されたこの書簡集の脚注（S. 744）で、リルケはカフカの作品を草稿でよみ、その感想をオイゲン・モントに語った、カフカはリルケの批評をモントを通じて、朗読会のあとのレストランの歓迎会の席上で聞いた、としたのである。

それ以後この問題について、少なくとも8人の文芸学者たちが言及している。リルケとカフカの出会いに否定的なのは、ボルンの他には、インゲボルク・シュナック（1975年）ただ一人である。リルケとカフカが実際に出会ったとするのは、マルコム・パスリー（1968年）、クリス・ベッツェル（1975年）、アンソニー・スティーヴンス（1977年）、ホルスト・ナレフスキー（1985年）であり、中立の立場をとるのは、ロナルド・ハイマン（1981年）、ヨアヒム・ウンゼルト（1982年）、エルンスト・パウエル（1984年）である。

ボルンの注釈に翌年反撃を加えたのは、マルコム・パスリーであった。パスリーは、カフカがリルケの評言に言及している手紙の個所を引用して、ここから明らかになるのは、リルケがカフカの作品をよく知っていた、ということのみでなく、「以前の仮定に反して」、リルケが個人的にカフカに会った、ということでもある、としたのである。

《明らかにリルケは聴衆のなかにいて、そのあとカフカと話したのである。……フェリーツェへの手紙の編集者はたしかにリルケとカフカの出会いを信じていないが、しかし上記の手紙の本文は、（特にその „meinte er“ という表現は）

他の推理を許さないように思われる。》⁴⁹⁾

パスリーが拠り所としたのは、明らかに伝達動詞 *meinen* である。しかしこの動詞は、「意見を表明する」「口に出す」という意味の外に「～の意見である」という意味もあり、これだけではリルケがカフカに意見を直接に述べたのだ、と判断する論拠としては薄弱の誹をまぬがれ難い。たとえリルケが直接に感想をカフカに伝えたい、ということは言えても、それを決めて手として断定することは、それだけでは不可能であろう。

クリス・ベッツェルもパスリーと同意見で、『カフカ年譜』の本文で「カフカは多分リルケと知り合った」とした上で⁵⁰⁾、さらに注釈の部分で次のように述べている。カフカの手紙の本文の文体上のいいまわしから、リルケは朗読会に出席し、その後でカフカと話をしたと推測せざるをえない、そうでなければ、カフカは、“*meinte*”という代りに、例えば“*soll er gesagt haben*”（彼は言ったということだ）と書いただろう、と⁵¹⁾。要するにベッツェルの論拠は、パスリーのそれを詳しく言いかえただけのもので、新しい着眼点があった訳ではない。

リルケがカフカと出会ったとする研究家のうち、あとの二人はそう判断した根拠を挙げていない。ステイーヴンスは、「シュナックは誤って、1916年11月10日にカフカが《流刑地にて》を朗読した際、そこに居合わせなかったとしているが、その反対が《ミレナへの手紙》から浮び上ってくる」⁵²⁾としているが、勿論《ミレナへの手紙》は《フェリーツェへの手紙》の誤りで、こんな軽率な混同を犯すようでは、その論拠もおして知るべし、である。

ナレフスキーは、「特に1916年から17年にかけての冬に、ミュンヘンの本屋ゴルトツによって主催された“新しい文学のためのタバ”をリルケは訪れたが、その際彼はテオドア・ドイプラー、エルゼ・ラスカー＝シューラー、アルフレート・ヴォルフエンシュタイン、フランツ・カフカが朗読するのを聞いた。」⁵³⁾としている。ここにも何ら論拠が挙げられていないばかりでなく、リルケがラスカー＝シューラーを聞いたというのは誤りである。従って特に深い根拠があってリルケとカフカの出会いが肯定されている訳ではない。

次にリルケとカフカは出会わなかったとするシュナックの判断をしらべてみよう。ここでもやはり判断の根拠は述べられていない。「聴衆のなかにリルケの友人マックス・プルファーは居たが、彼じしんは明らかに居なかった」としか書かれていない。シュナックはユルゲン・ボルンの注釈をそのまま無批判に受け入れ

ただで、パスリーの反論は知らないようである。

決定的判断を下さずに中立の立場をとる三人のうち、ハイマンは、「彼はリルケと会ったかも知れないが、朗読会にこの詩人が居たという決定的な証拠はない。……彼（リルケ）はこれらの感想を朗読会のあとで述べたか、或いは六週間前にミュンヘンに送られていた草稿を読んで、友人のオイゲン・モントとそれについて論じ、モントがその感想をカフカに伝えたのかも知れない。」⁵⁵⁾と述べている。決定的な証拠がない以上、このような相対主義が一番正しいのではあろうが、問題は論拠の深さにある。ハイマンはユルゲン・ボルンの推理の枠を一步もはみ出してはいない。それはカフカの草稿が六週間まえにミュンヘンに送られていたという記述で明らかである。既に前篇で指摘したように、原稿がミュンヘンについたのは10月30日、朗読会の10日前にすぎなかった。要するにハイマンはこの問題についてボルンの限界をこえることは何もしていない。

ヨアヒム・ウンゼルトは慎重に聴衆のなかに「ひょっとするとライナー・マリア・リルケさえ」⁵⁶⁾居合わせたかもしれないと述べているだけで、決定的な判断をさけている。

エルンスト・パウエルも同じで、「当時たまたまミュンヘンにいたリルケが自ら朗読を聴き、また実際に彼に会ったかどうかは、全く明らかなだという訳ではない」⁵⁷⁾として判断を回避している。

以上のごとく、この論争はつまる所、ユルゲン・ボルンの論拠とマルコム・パスリーの推理が提示した所を少しも越えていない。

〔I-6〕 結論にむけて

すでに述べたように決定的な確証がない限り、ハイマン、ウンゼルト、パウエルのように、断定を避け、「ひょっとすると……かもしれない」という以上のことは言わない方が賢明であろう。断定できないことは、断定できないと明言するのが科学である。

しかし他方では、人はなお推理することができる。ここでは両方の可能性について、ボルンやパスリーよりもう一步踏みこんで、どちらの可能性の方がより濃い、を可能な限り推理してみたい。

まずリルケとカフカが実際に会った可能性について考察を廻してみる。

第一にリルケはカフカの作品を1914年以来知っていたし、特に『変身』は女流画家ルー・アルベール・ラザールに朗読して聞かせたというから、高く評価していたことが解る。この朗読はシュナックによれば1914年10月16日頃のことと推定されている。これがすべての前提となる。

第二にリルケのカフカ作品評は、リルケの書いたものの中にはどこにも見当たらないこと。これも一般的な前提となる。

第三にもしリルケが書店ゴルツからカフカの原稿を借りたとしたら、リルケとゴルツがかなり親しかったことが前提とされなければならない。しかしリルケのゴルフ宛の手紙は一通もなく、ゴルツとの親交を証明できるものは今の所ひとつもない。むしろミュンヘンの書店では、ルートヴィヒ通り17aのシュトッベ(Horst Stobbe)の方が親交があった。1915年9月16日にリルケはカタリーナ・キッペンベルクと同書店に行っている⁵⁸⁾。16年11月13日には「ある若い少女」(ジビル・ファーネのことと思われる)が朗読するのにふさわしいように、「シュトッベの円卓で」トラークルの夕べを数人の人たちのために催し、自分も朗読するか、少くとも紹介をしたい、と手紙に述べているが⁵⁹⁾、このような親しさはリルケとゴルツの間にはみられない。さらに1918年には、この書店の「年鑑」にノワイユ夫人の詩の翻訳を載せている⁶⁰⁾。

そうである以上ゴルツからリルケの原稿を借り出す程の親しさがそう容易に推測できないのは明かではなかろうか？たとえゴルツが当時のミュンヘンで文学者たちの重要な情報交換の場であったとしても、またカフカの原稿が、当局の検閲をくぐらずに、10月30日から10日程ゴルツのもとにあったと仮定したとしても、である。

第四に、カフカの手紙の本文からは、どうしようもなくカフカとリルケが直接に面談したのだという印象が浮び上がってくることである。

パスリーとベッツェルの二人は“meinte”という伝達動詞にこだわっているが、むしろ重要なのは、“Nach etwas sehr Liebenswürdigem über den Heizer”という言いまわしであろう。リルケの意見では、『火夫』、『変身』、『流刑地にて』の三

作のうち、『火夫』が一番気に入っていた。確かに他の二作には、カフカのパー
スペクテイヴの独自性から起る作品構成上の破綻（とって過言なら、少くとも
裂け目）が不可避免的に結尾につきまとうという問題があり、リルケの読みは浅く
はないのだが、しかしかといって作品の価値として『火夫』が一番優るかとい
うと、そうは言い切れない。だが、リルケには少くとも『火夫』が最も一貫性のある
作品に見えたのであり、つまり、カフカがミュンヘンで朗読した作品はそれほ
どリルケの気には入らなかった訳である。しかしリルケは『流刑地にて』が気
に入らなかったとはいわないで、まず『火夫』を持ち上げておいて、それを『変身』
と『流刑地にて』の上に置いている。このような周到な外交的な配慮は、いか
にも直接にリルケの言葉がカフカに伝えられたかのような印象を与える。もし
オイゲン・モントの口を介して伝えられた批評だとすれば、これほどの配慮が
められたらどうか？

第五に、もしオイゲン・モントの口を通じてリルケの批評がカフカに伝え
られたとしたら、どのような会話の文脈で伝えられたか、それを考えてみなければ
ならない。

カフカは朗読会の後のレストランでの会食の際に、モントに、「私は私の小
さな汚い話を読むべきではなかったでしょうに」と言ったという。モントは、
カフカにそんなことはない、正にその反対だということを証明しようとした。そ
してそれに続いてリルケの話をしたことになっている⁶¹⁾。もしモントがこの際
リルケのカフカ評を伝えたとしたら、モントは内心苦しかったにちがいない。
なぜならリルケの批評は、巧みに仮装されてはいるが、紛れもなく、朗読され
たばかりの『流刑地にて』に対する否定的な批評に他ならず、もしモントが、
カフカがこの作品を朗読すべきだったと説得したすぐ後でリルケの批評を伝え
たとしたら、『流刑地にて』を肯定的にとらえた舌の根も乾ぬうちに、『流刑
地にて』は『火夫』以下の作品なのだといってしまうことになる。

モントのリルケについての話は、「あなたと同郷の詩人リルケが今ミュンヘ
ンに住んでいて。……」といった風な、あたりさわりのない話だったとする
方が順当なのであるまいか？カフカはモントがリルケの話をする間、「むしろ注
意深い聴き手のままでいた」⁶¹⁾となっているが、それはよもやまの話だ
ったからではないか？自分の作品評を聴かされて、「聴き手のままでいる」こ
とは難しいのではなからうか？もっともカフカは余程打ちとけた間柄でな
ければ、無口なこと

が多かったので、断定はし難いが、リルケの批評ともなれば、その真意をただすとか、もっと深いさぐりを入れるとか、或いは自分の作品についていくらかの弁明をするということもなく、ただ相手の話を傾聴するだけに終止するのは、不自然のようにも思われる。

第六に、リルケの批評で中心をなす概念は“Konsequenz”（一貫性）という言葉である。かねがね気にかかっていたのは、この語彙は、リルケの批評言語としてはそう頻繁に用いられるものではないことである。もしこの言葉がリルケの批評用語の中になければ、リルケの批評は変奏されて、つまり第三者の口を介して伝えられたのではないか、という疑惑は当然生まれる筈である。

だがこの言葉は少くとも二度、リルケの手紙に使われている。そのひとつは、1915年6月28日のカタリーナ・キッペンベルク宛の手紙で、ヴェルフェルの詩集《Einander》を“konsequent”と呼んでいる⁶²⁾。今ひとつは、1919年9月12日のアニー・メーヴェス宛の手紙で、画家ハインリッヒ・フォーゲラーのことを「少しも“konsequent”ではない」と批評している⁶³⁾。従って我々がここで問題にしている1916年をはさんで、その前後四年間にリルケの批評用語としてこの言葉は確かに使われていた。これはリルケの批評が紛れもなく彼のものに他ならない真正性（Authentizität）を裏づけるものである。

勿論これをもって直ちにリルケの評言がカフカに直接に伝えられたことの傍証とするつもりはない。一貫性という言葉がリルケによって使われていることは、モントを通じてリルケの言葉がカフカに伝えられたとしても、そのことと無矛盾である。しかし少くとも、この一貫性という言葉がリルケの批評用語として現に用いられているという事実は、どんなに少くみつもっても、リルケの言葉がカフカに直接伝えられたと仮定してもおかしくない、ということだけは語っていよう。

第七として、リルケがカフカの朗読会に出席していたと仮定して、なぜそこに出席していた他の人達の回想になんらの言及も見出されないか、という疑問にひとつの仮定を提出してみよう。

リルケがひとなかで目立ちたがらなかった、とルー・アルベール＝ラザールは回想しているが⁶⁴⁾、これもひとつのファクターとして考えておかねばならないことである。その上にリルケは、すでに述べたように、第四回の朗読会でドイプラーの作品に失望し、それからはリルケはドイプラーに会うことを避けていた⁶⁵⁾。ド

イプラーの朗読の約二週間後に行なわれたカフカの朗読会で、リルケが人目を、とりわけ他の作家たちの目を避けようとしたとしても不思議はない。それに第一、モントヤプルファーの回想は、カフカの朗読会の全体の雰囲気やカフカその人の描出には意を用いているが、その誰が居合わせたかにまでは言及していない。リルケが出席していたとしても、人目につかなかったかもしれないし、ついても言及されなかったただけかも知れない。ここでは偶然が支配しているかも知れないのだ。

第八に、リルケがドイプラーの朗読会のことはキッペンベルクに詳しく報告しているのに、なぜカフカの朗読会のことは一言も触れていないのかに不審を抱く人もいるかもしれない。しかしこれには理由がある。第一に、リルケはカタリーナ・キッペンベルクに、ドイプラーを聞くように依頼を受けている。従ってドイプラーについては詳しく報告する義務があった。これに反して、ヴォルフエンシュタインの朗読をリルケが聞いたことは確証されているのに、リルケはヴォルフエンシュタインについては一言も触れていない。だとすれば、カフカの朗読を聞いて、しかも一言も言及しなかったとしてもおかしくはない。

さらにリルケはキッペンベルクに対して、カフカのことに触れにくい理由があった。それはインゼル書店とクルト・ヴォルフ書店のライヴァル意識である。カフカはクルト・ヴォルフ側の作家であったから、キッペンベルクに彼のことを語るのは適切な話題とはいえなかった。特にリルケがエッセイ『人形』を『ヴァイセン・ブレッター』(クルト・ヴォルフ刊)の1914年3月号に載せたことは、アントン・キッペンベルクをいたく立腹させた⁶⁶⁾。キッペンベルクはリルケに「私の名を危うくする」⁶⁷⁾「この上なく具合の悪い不意打ち」⁶⁸⁾とこの事件を呼んだ。リルケがこの年7月19日にパリを離れライプツィヒに行ったのもこの事件の和解をはかることがひとつの要件であった。そのような状況でリルケがキッペンベルクに対してカフカのことを、避けたい話題と考えたのは当然といえる。



扱って今度は逆に、リルケとカフカは会わなかったという立場に立って推理してみよう。

紙数の関係でもはや同じ密度で推理を展開できないので、ポイントだけおさえ

ておくと、まず原稿の問題が浮び上がる。

ユルゲン・ボルンはいとも簡単に、リルケがカフカの「流刑地にて」を原稿の状態で読んだのだろうと述べているが、事はそれを程簡単ではない。まずカフカの原稿は、ボルンの推定より1ヶ月おくれて、10月30日にゴルツの所に到着した。私の推定ではそれからカフカの原稿は検閲を通った。

この検閲の問題について、もうひとつダメを押しておくと、オイゲン・モントの回想に自分の作品『死からの跳躍』を警察の検閲をくぐらせた体験が語られている。

《私がミュンヘンの警察本部の建物で、ある警部との間に経験したちょっといい事件もあの頃の事である。ドイツ作家保護協会を通じて、当時私は自分の『死からの跳躍』をシュタイニッケ・ホールで朗読するつもりだった。

当時はこれに関して警察の許可をもらってくる事が必要だとひとは私に説明してくれた。》⁶⁹⁾

モントが当該の部屋にある警部を訪れると、彼は眼鏡ごしに不信のまなざしで、死から跳躍するなんてできません、といった。モントはそんなことをする気は毛頭ないという、彼はいくらかの押し問答の末、許可を出してくれたという。

この挿話によっても、朗読会の原稿は検閲をくぐらねばなかったことが解る。しかしその手続きは案外簡単なものだったかも知れない。

もし検閲が単なる形式に近い簡単なものだったとしても、ゴルツからリルケの手にどのようにして原稿が流れたかは明らかでない。リルケがゴルツと懇意であったという根拠は全くない。リルケは、既に触れた通り、ミュンヘンで『時祷書』の朗読をイルゼ・ブルックマンに乞われた際（彼女の元来の提案は『旗手』であったが）、会場として、「ルートヴィヒ街か、画廊シュタイニッケ」を考えている。ルートヴィヒ街とは、既に触れたように、17番地aのホルスト・シュトッペのことであろうし、シュタイニッケとはモントが自作を朗読した場所である。

リルケは自作の朗読で直ちにゴルツの会場を考えていないとすれば、少なくともゴルツとの親しさは第三位以下ということになる。

ここで画廊ゴルツとも親しく、カフカとも知己でありであり、かつリルケとも交友のあった人物を想定してみると、カール・ヴォルフスケール (Karl Wolfskehl) の名が浮び上がってくる。

第一にヴォルフスケールは、1914年6月21日にプラハでカフカと会っている⁷⁰⁾。

カフカのミュンヘン朗読の二年以上前のことである。それ故知人のミュンヘンでの朗読のことは彼の関心事となったにちがいない。

第二に、ヴォルフスケールは1919年7月までミュンヘンのシュヴァービングに住んでいて⁷¹⁾、「私の近所に住んでいたリルケ」⁷²⁾と「かなりの親交」⁷²⁾があった。

第三に、沢木四方吉の回想によれば、ヴォルフスケールは1913年12月頃自宅で沢木をカンディンスキーに紹介したという。ヴォルフスケールは当時、木曜ごとに茶会を催し、多くの友人を自宅にまねいていた⁷³⁾。そしてカンディンスキーは、1912年2月12日から14日までゴルツの会場で展覧会、「青騎士」編集部主催による第二回展を開いている⁷³⁾。従ってゴルツ、カンディンスキー、ヴォルフスケールは相互に知己であったと推定できる。

またリルケは1916年9月に、フランツ・マルクの遺作展をヴォルフスケール、カスナーとともに訪れている⁷⁴⁾。従ってリルケとヴォルフスケールの16年秋頃の親交は疑いえない。

もしリルケが草稿の状態でカフカの作品に触れたとしたら、多分リルケ自身がゴルツから借り出したのではなく、カフカと知己であり、ゴルツとも親しかったヴォルフスケールがカフカの草稿を入手し、リルケは彼のもとでそれに接したのではなかったらうか？

最後にひとつ取って置き、挿話をひとつ据えてみよう。カフカの朗読が終わった直後のことである。会場にいたマックス・プルファーは次のように回想している。

《朗読のあと数人の聴衆が残って彼と話をしていた。私もその中にいた、かなり黙りがちに。

にも拘らず私は次の日の午後カフカと一緒に散歩する約束をした。彼は間もなくまたプラハに帰らねばならないからであった。》⁷⁵⁾

もしリルケがカフカの朗読を聴きに会場に来ていたとしたら、そしてカフカと言葉を交していたとしたら、プルファーが回想しているこの「数人の聴衆」のなかにリルケが混っていなければならなかった。プルファーの回想は、少なくともカフカが朗読後、数人の聴衆と話をしたという点では、その限りではリルケ・カフカ邂逅説に有利である。とともに、もしこの数人のなかにリルケが居たら、プルファーがそれに言及せずに済ませたか、という疑問が残る。



最後に結論を述べるべき所であるが、研究の現段階では、決定的な確証がえられない以上、一義的な解答は出すことが出来ない。秤の皿の一方に、 Rilkeがカフカに会った可能性を載せ、別の皿に反対の可能性を載せると、秤はそのままだに動かないかもしれない。一義的な結果が出なければ、実証的な研究は失敗だとするなら、我々の試みは全く失敗に終わったことを率直に認めないわけにはいかない。しかしもし問題は過程であり、推理と根拠の深さだとすれば、ここにはパスリーやボルンの推理の域はいくらか拡大されているかもしれない。ここにはRilkeとカフカの邂逅について判断する手がかりは、一応集められるだけは集められている。私は無理な結論を急ぐより、むしろ読者諸賢の御教示とアンガー・ジュマンを乞うことにしたい。ここに到って改めて、マールバッハの文学文書館でシュトルク博士が、「この件は全くもって不可思議な^{ミステリエース}のです」とおっしゃった言葉が千鈞の重みでのしかかってくる気がする。

さて次号では、もしそれまでにRilkeとカフカの出会いについて新しい事実が得られれば、それを報告し、得られなかった場合は、すでに触れたマルコム・パスリーが指摘している「カフカがRilkeに与えた広範な影響」について検討し、さらに、カフカ文学とRilke文学がどのような観点から比較可能か、という問題を素描してみたい。

(続)

文献と略号

A) Primärliteratur

- 1) SW.=R. M. Rilke : Sämtliche Werke, I – VI (Insel, 1955–1966)
- 2) GB.=R. M. Rilke : Gesammelte Briefe, I – VI (Insel, 1935–1937)
- 3) BTF.=Briefe und Tagebücher aus der Frühzeit 1899–1902 (Insel, 1931)
- 4) Briefe an Gräfin Sizzo=R. M. Rilke : Briefe an Gräfin Sizzo (Insel, 1977)
- 5) Briefe an Sidonie=R. M. Rilke : Briefe an Sidonie Nádoherný von Borutin (Insel, 1973)
- 6) Briefe an Verleger=R. M. Rilke : Briefe an seinen Verleger 1906 bis 1926 II Bde. (Insel, 1949)

B) Briefwechsel

- 1) R. M. Rilke–Lou A.-Salomé : Briefwechsel (Insel, 1979)
- 2) R. M. Rilke–Katharina Kippenberg : Briefwechsel (Insel, 1954)
- 3) S. Freud–Lou A.-Salomé : Briefwechsel (S. Fischer, 1966)

C) Sekundärliteratur

- 1) Albert-Lasard=Lou Albert-Lasard : Wege mit Rilke (Fischer, 1952)
- 2) Bezzel=Chris Bezzel : Kafka-Chronik (dtv3252, 1983)
- 3) Im Zeichen Hiobs = (hg.) G. E. Grimm, H.-P. Bayerdörfer : Im Zeichen Hiobs (Athenäum, 1986²)
- 4) Hayman=Ronald Hayman : A Biography of Kafka (Weidenfeld an Nicolson, 1981)
- 5) Leppmann=Wolfgang Leppmann : Rilke (Scherz, 1981²)
- 6) Mondt=Eugen Mondt : München-Dachau, ein literarisches Erinnerungsbüchlein [Typoskript : Stadtbibliothek München, Nachlaß Eugen Mondt] Franz Kafka S. 42—48
R. M. Rilke S. 50—58
- 7) Nalewski=Horst Nalewski : R. M. Rilke in seiner Zeit (Insel, Leipzig, 1985)
- 8) Pasley=Malcolm Pasley : Rilke und Kafka Zur Frage ihrer Beziehungen.
in "Literatur und Kritik" Nr. 24, 3. Jg. 1968 S218—225
- 9) Pawel=Ernst Pawel : The Nightmare of Reason, A Life of F. Kafka (Vintage Books, 1984)
- 10) Prater=Donald A. Prater : Ein klingendes Glas (Hanser, 1986)
- 11) Pulver=Max Pulver : Erinnerungen an eine europäische Zeit (Orell Füssli, 1953)
- 12) Schnack=Ingeborg Schnack : R. M. Rilke, Chronik seines Lebens und seines Werkes.
II Bde. (Insel, 1975)
- 13) Stephens = Anthony Stephens : Zum "Inneren Gericht" bei Kafka und anderen. in "Türen zur Transzendenz" Internationales Kafka-Symposium in der Evangelischen Akademie Hofgeismar (1977—12—9 ~11)
- 14) Unselde=Joachim Unselde : Franz Kafka, ein Schriftstellerleben (Fischer Tb. 6493, 1984)

註

- 1) BTF. 138
- 2) GB. V, 304
- 3) 加藤雅彦 : 中欧の崩壊——ウィーンとベルリン (中公新書689, 1983) P. 93
- 4) GB. I, 338—9
- 5) Blätter der Rilke-Gesellschaft, Heft 13 (1986) S. 60
- 6) Schnack, 762—3
- 7) SW. IV, 536—567
- 8) GB. V, 253 「私の宇宙年曆の統治者」とヤコブセンを呼んでいる。
- 9) Schnack, 476 但し, GB. IV, 24には7月20日, GB. IV. 291には7月21日となっている。
- 10) R. M. Rilke — L. A.-Salome : Briefwechsel 352
- 11) GB. IV, 25, 291
- 12) Briefe an Gräfin Sizzo, S. 108
- 13) GB. IV 24
- 14) GB. II 302—3
- 15) GB. IV 292

- 16) GB. IV 55
- 17) GB. IV 25
- 18) Briefe an Verleger II S. 295 及び Prater 365
- 19) Leppmann 367
- 20) Prater 445
- 21) Leppmann 367
- 22) Leppmann 370—1
- 23) Briefe an Verleger. II 299
- 24) Prater 458
- 25) S. Freud—L. A. Salomé : Briefwechsel S. 56
- 26) GB. IV 105
- 27) Briefe an Sidonie : S. 261
- 28) Briefe an Verleger II 299
- 29) Schnack 542
- 30) R. M. Rilke—K. Kippenberg : Briefwechsel S. 178
- 31) Ebenda S. 178
- 32) Ebenda S. 178—9
- 33) GB. IV. 116—7
- 34) Rilke—Kippenberg : BW. S. 181—2
- 35) Briefe an Sidonie S. 263 (7—Nov. —1916)
- 36) Schnack 546
- 37) Schnack 1260
- 38) Mondt S. 47
- 39) なぜならジビル・ファーンネはカフカ回想の最後の部分で (S. 47) 言及されるが、すぐそれに続くリルケ回想の部分では明らかに同一人と思われるのに匿名化されている。プライバシーの保護のためであろうが、それには匿名化されねばならなかった理由があると思われる。
- 40) Mondt S. 54 S. 55
- 41) Mondt S. 56
- 42) Mondt S. 54
- 43) GB. IV 119
- 44) Rilke—Lou : BW. S. 376
- 45) Schnack 552
- 46) Leppmann 378
- 47) Nach der freundlichen schriftlichen Mitteilung des Dr. Heyl (25. 2. 1988, Bayerisches Hauptstaatsarchiv—Kiegsarchiv—)
- 48) GB. IV 59—60
- 49) Pasley S. 220
- 50) Bezzel S. 120
- 51) Bezzel S. 197
- 52) Stephens S. 96
- 53) Nalewski S. 169—170

- 54) Schnack 544
- 55) Hayman S. 214
- 56) Unseld S. 142
- 57) Pawel S. 351
- 58) Schnack 511
- 59) Schnack 544
- 60) Schnack 618

なお、GB. IV 58 にはエルザ・ブルックマンのために「時祷書」を朗読する会場としてルートヴィヒ街を挙げているが、これもシュトゥッペのことと思われる。

さらにプルファーは、リルケとはじめて出会ったのが、この書店であったと回想している。

(Pulver 60)

- 61) Mondt 42
- 62) R. M. Rilke—K. Kippenberg : BW. 124
- 63) GB. IV 266
- 64) Albert—Lasard S. 72
- 65) GB. IV 117
- 66) Prater 420
- 67) Briefe an Verleger 270
- 68) Ebenda 279
- 69) Mondt 46
- 70) Kafka : Tagebücher 401—2
- 71) Im Zeichen Hiobs S. 113
- 72) Schnack 643
- 73) 沢木四方吉 : 美術の都 (岩波書店 昭和39年) P. 169 (この情報は、東京医大の城真一氏におおいだ。心から深謝したい。)
- 73) カンディンスキー展・カタログ (1987年、東京) (この情報も、城氏に負う)
- 74) Schnack 541
- 75) Pulver 53